

「21世紀COEプログラム」(平成14年度採択) 中間評価結果表

機 関 名	京都大学	拠点番号	D10
申請分野	人文科学		
拠点のプログラム名称 (英訳名)	心の働きの総合的研究教育拠点 (Center of Excellence for Psychological Studies)		
研究分野及びキーワード	＜研究分野: 心理学＞(注意・意識)(比較認知心理学)(生涯発達)(文化)(心理療法)		
専攻等名	文学研究科行動文化学専攻、教育学研究科教育科学専攻/臨床教育学専攻、人間・環境学研究科共生人間学専攻、情報学研究科知能情報学専攻		
事業推進担当者	(拠点リーダー) 藤田 和生 教授 他 20名		

◇拠点形成の目的、必要性・重要性等：大学からの報告書(平成16年1月現在)を抜粋

<p><本拠点がカバーする学問分野について></p>	<p>1) 認知機能と意識と情動に関する実験心理学、認知心理学、それらの発生過程に関する比較認知科学、発達認知科学、文化心理学、及びそれらの神経機構に関する認知神経科学</p> <p>2) 社会的適応と社会的実践に関する臨床心理学及びフィールド心理学</p> <p>3) 隣接分野として、行動と認知に関連する言語学、社会学、哲学、生物学、医学</p>
<p><本拠点の特色及びその目的等></p>	<p>急速な物質文明の発展により、人々の心は多くの問題を抱えている。この緊急かつ重要な今日的問題の解決を目指し、実験科学、フィールド科学、臨床実践科学という3つのアプローチを融合して、心の機能の総合的研究のための新たな方法論と新たな人間観を提示しようとする点が本拠点の特色である。京都大学は上記3領域いずれにおいても随一の研究実績を挙げてきた。その有機的連携により、さらに高度な世界的研究教育拠点へと発展させるとともに、後進を育成する。</p>
<p><COEを目指すユニーク性></p>	<p>他の多くの大学同様、京都大学においても心理学系教員が多数の部局に分散して配属されている。しかし、その独自な点は部局を超えた連携を30年にわたり続けてきたことである。今日的な心の問題を解決するには、時に水と油のように言われる実験系心理学と臨床系心理学の融合が不可欠であり、これこそが、本拠点において部局間連合によるバーチャルな心理学研究科(京都大学心理学連合)の構築を通じて実現しようとする内容である。</p>
<p><本拠点のCOEとしての重要性・発展性></p>	<p>上記の実験系心理学と臨床系心理学の融合は、京都大学のような群を抜く研究業績を挙げてきた拠点においてこそ実現可能なことである。全国で唯一選ばれた心理学の総合的研究教育拠点として、その波及効果は心理学系の学会全体に及ぶであろうし、こうした試みは世界的に見ても類を見ないものである。特に、単なる研究協力だけではなく、実験から臨床までの教育の共通化を通じて育成される次代の心理学者は、既製の枠にとらわれない21世紀の心理学の開拓者となろう。</p>
<p><本プログラムの事業終了後に期待される研究・教育の成果></p>	<p>研究成果については、着実な学術雑誌への公刊の他、数冊の英文単行本にまとめる。一般向け和書を多数出版し、心に興味を持つ多くの人々の啓蒙にも寄与する。</p> <p>教育については、事業終了後もカリキュラムの共通化を維持し、それによって、基礎から実践までの多様な心理学的手法と視点を持った新たなタイプの心理学研究者を継続的に育成する。</p>
<p><背景となる当該研究分野の国内外の現状と動向、期待される研究成果と学術的・社会的意義、波及効果等></p>	<p>意識から社会的実践までを単一プロジェクトに統合する試みは国内外を通じて初めてだろう。これから、心の働きの多面性と多様性及びそれらを支える種々の内的・外的要因が明らかにされよう。これは2つの意義を持つ。第1は多様な心に通底する基礎的過程の同定、第2は、発達差、種差、文化差、病理を、それぞれ独立した心として捉えるという視点の転換である。特に後者は、社会的弱者への福祉や地球共生系の保全に、重要な概念的サポートを提供することになるだろう。</p>

機 関 名	京都大学	拠点番号	D10
拠点のプログラム名称	心の働きの総合的研究教育拠点		

◇ 21世紀COEプログラム委員会における評価

(総括評価)

このままでは当初目的を達成することは難しいと思われるので、下記のコメントに留意し、当初計画の適切なる変更が必要であると判断される。

(コメント)

心理学の領域が細分化されている今日、実験科学、フィールド科学、臨床心理学の融合を目指す本プログラムは、COEプログラムにふさわしいテーマを掲げたものである。また、各事業推進担当者はそれぞれ我が国を代表する優れた研究者であることから、その拠点形成は大いに期待されているといえよう。

しかし、15年度までの実績、提出された16年度以降の拠点形成実施計画を見る限りでは、残念ながら各領域内での従来研究の延長という面が強く、このままでは当初の目的の達成は難しいことは明らかである。実験科学、臨床科学、実践科学の融合についての具体的な取り組みとしては、学内研究組織の交流と再編という形ではある程度実現しているが、実質的な研究成果としては、「感情科学」の取り組み（これ自体は評価できる）を除くと、「心の宇宙」とか「身体化された心」など抽象的なテーマがかかげられているものの、具体的な研究成果がどのようなものか明らかでない。いきなり全体を統合しようとする漠然とした研究テーマではなく、むしろ、2つなり3つなりの領域が緊密に交流して取り組む、実質的成果が期待できるような具体的なプロジェクトをいくつか設定して、それらを積み上げることによって全体の統合を図るというような研究計画に変更されることが望ましい。